
子供の描く苦い恋

come猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子供の描く苦い恋

【Nコード】

N0797X

【作者名】

come猫

【あらすじ】

ある日の昼休み、止まっていたものが動き出す。

昼休み

昼下がりのうららかな休み時間、俺たちは小さなカフェで昼食を摂っていた。

いつもの時間に、3つほどしかバリエーションがないメニューを選び、木造の椅子に腰を下ろし、何気ない会話を交わす。

「俺は飯塚さんより松木さんのほうが人望あると思うけどね」

「いや、松木さんはあれでいて中々あくどい。近いうちにボロをだすよ」

「なんだ、通ずるところでもあるのか？」

そういつて、ふざけ気味に笑う。

「いんや。ただ、あの人は変態だから」

嫌に神妙な顔。

「どうして？ SMクラブにでも通ってたのか？」

少し笑いが引きつる。

「いや、勘だ」

「勘かよ……」

なぜかがっかりする俺。

「けど、あの人は、わきまえのないサディスト気取りだから。少なからず上からは目、付けられてるよ」

「あれ？ 俺はけっこう優しくされてるんだけど」

「あの人、ゲイだし」

「……早くクビにならないかな」

「そろそろ戻るか」

俺は立ち上がるが、なぜか悪友は立ち上がらない。不思議に思っているよ、

「いや、まだ戻らない」

「どうして？ 午後からの集会に間に合わないぞ」

俺たちの会社は昼休みの終わりに、午後からの仕事のスケジュールの確認と、誰が何をするかを割り振る。

「問題ない。今日の俺らの班長は鹿浦さんだ。あの人なら巧くやる」
「……どっこいしょ」

俺は腰を下ろした。

集会をサボり、他愛のない話を繰り広げていると、俺の後ろ（悪友の正面）から声がかけられた。

「あの、お二人とも戻らないんですか？ 集会、始まっちゃってますけど」

声に驚き、軽く悲鳴をあげた後、ニヤニヤと笑っている悪友に嫌な予感を感じながら、後ろを振り向いた。

「あ……、代ちゃん」

「私は代塚です。先輩、サボりですか」

「そういう代塚こそ、サボりじゃないのか？」

悪友の鋭いツッコミ！ 代塚は20のダメージ！

「先輩たちを探しにきただけです」

「昔からまじめだねー代ちゃんは」

この後輩、代塚は小学校からの後輩なのだが、何かとまじめぶる。どうも、人の目を気にするけど、悪い事はする、といったタイプなようだ。そして口論に弱い。

「先輩は相も変わらず不真面目ですね」

けなすような、決まった返し言葉のような物言い。無論、彼女の顔はにやけている。

「君ほどじゃあないよ」

「そうそう、代塚はバカだ」

「なんでそうなるんですかっ!」

代ちゃんも腕をぶんぶん振り、悪友に必死の抗議。

「いや、まだ悩んでいるのかなー、とね……」

「なっ!?! な、なな何のことでしょうか」

しかし悪友はDSであった。ご愁傷様です。

「ふ、今なら言えるぜお嬢さん?」

「……遠慮しておきます。では、二人は見つけられなかったことにしておきますので」

そういつて、すたすたと歩き出そうとしたところを悪友に捕獲された。

「はっ、離して下さいっ!」

「そっだよ、捕まえてどーすんの?」

「お前は黙ってる。そして瞑想をしている」

意味は分からないがとりあえず従う。

「さて、代塚。用件は了解してるな?」

悪友のあくどい笑い声が聞こえる。

「先輩には関係のない話じゃないですか……」

一方、代ちゃんは泣きそうな声。これは瞑想なんてしている場合なんだろうか。

「いや、ある。お前のせいで俺に彼女ができない」

「……どうしてですか?」

「お前が俺について来るからだろーが! 昨日、ある女の子に言われたんだ『代塚さんって、可愛いね……』この一言の意味、わかるな?」

「ちよつと待つてください。語弊があります」

語弊ってなんだろう。

「私は別に先輩について回っているわけではありません」

「じゃあ、毎日俺たちの後ろについてきたことは間違いないっ

てわけだ」

あれ？ そんなこといったっけ。

「……それは、事実ですけど」

「じゃあ、代塚は、今！ 瞑想なんてしてるバカに！ ついて回ってたというわけだな！」

「待てコラ。俺の今までの瞑想時間返せ」

「否定は？」

無視された。

「……しません」

「んじゃ、思いを伝える」

「……嫌です。できません」

「といつてもなあ？ おまえ、大体の流れはわかったろ？ その先の結論も」

俺は嘘をつく。彼女が泣くのは嫌だから。

「先輩、ほんとにわからないんですか……？」

「うん、さっぱりだ。良かったら教えてくれないか？」
笑いかける。

「絶対いやですよ」

そういつて、顔を火照らせて、笑ってくれた。

「さ、戻ろうか？」

「はいっ！」

「いや、戻らないよ？」

「……え？」

悪友は ハッピーエンドが大嫌い。

サボリ

うららかな昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

その音が沈黙を打ち消し、小さなカフェで佇んでいる俺は言葉を発した。

「戻る「戻らない」

……。

「まあ、座れよ二人とも」

俺は無言で頷き、座ろうとする。

「……嫌です。私は戻ります。戻らないのは先輩たちだけにしてください」

「代塚、後悔するぞ？ そして公開するぞ？」

「後悔ならもうしていますっ！」

軽いギャグは流されます。

「なら、当たって砕けるよ。当たったまま逃げるなんて卑怯にもほどがあるぞ？」

ちなみに、代塚は当たっていません。

「……何度も言いますけど。言えるわけじゃないじゃないですか、今のこの人に」

代ちゃんはいいい子だ。

「本当は伝えたくて、でも言っちゃいけない……！」

優しいし、気配りもできる。

「私、どうしたらいいかわかんなくて……」

それに純情でちょっと不真面目。

「先輩の……バカア……！ うえええーん……」

俺は、慰める事しかできない。

「ごめんね、代ちゃん……。泣かないで……」

背中を擦ってあげようとすると、手を握られた。

「泣くぐらいなら想いを伝えるよっ……チッ！」

さすがに、これには怒るでしょ。

けど。

でも。

言い訳が、次々とでてくる。

何に、何を、弁解するのか。わからないままに。怒った。

「おい、言いすぎだろ。代ちゃんの気持ちも考えろよ……！」

「そういうお前は考えてんのかよっ！ アア!？」

右拳が俺の左頬を殴る。

痛いとも言えないし、考えているとも言えなかった……。

「お前がいつまでもうじうじしてっからわりーんだろっ！ そろそろ現実とも向き合えよ……！」

どうして、俺は、何も言えないんだろっ。言い訳は得意だったのに。

「過去じゃなくて、今を見てもいいじゃねーか！」

その通り、だった。わかってはいるんだ。

「お前が幸せなほうが、アイツだって喜ぶんだよ……！」

「もう、いいです、先輩」

俺は、声のするほうを向いた。

自然に。

涙が出た。

「私は、先輩が好きです。初めてあったときから、好きでした。ずっと、一緒にいたい」

わかっていた。

全部、知っていた。

答える事は、できなかった。

決意

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴って半時間。

俺達はまだカフェにいた。

ドラマで言えば、クライマックス、見せ場だろう。

そう、おれは、告白された。

可愛い、後輩から。

「少し、時間がほしい……」

といって俺は逃げた。今は、悪友と向かい合い、黙り込んでいる。後輩、代ちゃんはテラスから店内に戻り、ぼーっとしているようだ。

「……俺はこれ以上、なにか言うつもりはない。決めるのは、お前だ」

「……わかってる」

わかってなんてなかった。

自分の気持ち。

代ちゃんが俺を好きなのは、わかってた。

ずっと、昔から。

俺に、愛する人がいた時から。

「……一つ言っておくと、お前が代塚と付き合うのは、彼女に対してなんら悪い事ではない、と思う。それより、今のまま、過去に囚われているほうが……」

悪友は、言葉を切る。これ以上は言わせるな、という事だろうか。「そう簡単に、過去を振り切るなんて、できないよ……。代ちゃんには悪いけど」

「もつと、単純に考えたらどうだ？ その、彼女はもう、いないんだ。たとえどれだけ好きであっても、もうお前が愛される事も、愛する事もできない。そんな虚像にばかり構ってないで、現実で、

愛してくれる人と向き合ってみないか？ 忘れるといつてるわけじゃない。はじめ、過去との区切りをつけたらどうだ」

「ああ、わかってるんだ……。けど、できない」

ほんとに最低だな、俺は。

きつと彼女も、生きていたらこういつてくれるだろう。

『自分にくらい素直になりなさい』

俺は……！

「俺、代ちゃんと話してくる」

「……しくじんなよ？」

「多分、な……」

俺は、ゆっくりと、店内に通じる扉を開いた。

終わりにしようか、な

店内に入ると、代ちゃんだけしかいなかった。

店員も客もいない。

少し異様だが、この時間に来る客なんて滅多にいないだろうし、店員も店の奥で休んでいるのだろう。そう考えれば納得もいく。

代ちゃんは、扉を背中側に、一番奥の席に座っていた。

誰かが入ってきた事は、扉の開く音でわかるし、意識的にこちらを見ないようにしている。

…… 一度外に出てみた。

十秒くらいしてから再び店内に入ると、涙目で怒り顔の代ちゃんがこちらを睨んでいた。

俺は駆け寄り、向かいの席に座る。

「…… ばか」

俺が席に着くと同時に飛び掛ってきた、小さな言葉の針。

それは、俺の心に刺さって、痛んだ。

「代ちゃん……」

「なん、ですか……」

彼女は少し俯く。

「俺、答えを決めたけど、その答えは、代ちゃんを怒らせるものかもしれない。だから……」

「早く、言ってください!」

怒鳴られた。当然の反応かもしれない。

「うん……。俺は」

「カランコロン」 すいませーん、店員さーん。

俺はこのとき、友達ってなんだろう、と真剣に考えました。

あろうことが、入ってきたのは俺の親友で悪友。しかも俺たちの席の斜め前（代ちゃんから見れば斜め後ろ）

俺はあからさまに嫌な顔をし、代ちゃんは完全に引いている。

「あの、続き……お願いしましゅ！……っあ！」

か、噛んだ。まさかここで噛むとは、非常に残念な子である。

俺は苦笑いで流そうとしたが、親友は死にそうなくらい笑いをこらえている。死んでしまえばいいのに。

「ああ、俺は、今は、代ちゃんと付き合えない。付き合ってもきつと好きになれないと、思う」

「今は、って……どういうことでしょう」

泣きそうだ。

「けじめをつける、時間がほしい」

「忘れるための、時間ですか……？」

「うん。けじめがついたら、改めて、俺が、代ちゃんに告白する」

「え……？」

「そのときまで、待ってくれ、なんて卑怯な事は言わない。その間に好きなや「それ以上は言わないください！」

彼女の笑顔は、心が痛む。

「本当なら、『優柔不断！ 意気地なし！ ばか！ おたんこなす！』と怒りに怒っているところですが、これが先輩なので。先輩は優しいので。受け入れます」

「はは……、俺ってそんなかんじなんだ……」

安心したような、悔しいような。

彼女にも、そう思われたりしてたのかな？ 何て考えたり。

「ええ、だから……ずっと、待ってます。なるべく早くがいいですけどねっ。では、私は戻ります！」

にこっと微笑み、彼女は店を後にした。そして

「死ね、意気地なし」

親友に肩を組まれ、店員さんに囲まれてました。

「今日は俺のおごりだぁ！ ……バイクングでいいですか？」
恐る恐る聞いてみる。

「ばかやろう！ けちけちすんな！ みんな、今日は高級肉が食えるぞ〜！」

おー！ と勇ましい方々の叫び声。

「……ま、いいか」

これは、どこかの小さなカフェの日常。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0797x/>

子供の描く苦い恋

2011年10月13日13時50分発行